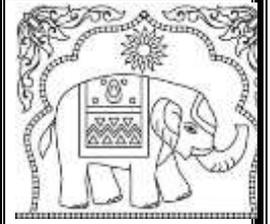


まいとりに मैत्री

No.15 平成23年度 冬号 -2011. 12. 24-
東洋大学仏教青年会・東洋大学仏教会発行機関誌



< मैत्री > :maitrī (マイトリー) とは、慈しみ、友情、思いやりを意味する古代インドのサンスクリット語です。
仏教では慈(いつくしみ)・悲(あわれみ)・喜(よろこび)・捨(とらわれない心)という四つの広大な利他の心(四無量心)の一つです。

～研修報告～

阿弥陀寺 報恩講：廣陵兼純師の節談説教を聞く

まさに2011年11月27日は、親鸞聖人七百五十回忌にちなむ催しが、聖人のご命日の28日を明日に控えて執り行われるにふさわしい日和でした。その日差しの中朝の9時、岩井昌悟先生、本澤綱夫さん、鈴木洋志君と私(田邊)は時間通りにJR外房線本千葉駅改札に集合して、4人でタクシーに乗り込み、阿弥陀寺に向いました。到着するや否や、お檀家、取材陣のにぎわう中、私達一行は、東洋大学大学院のご出身で阿弥陀寺ご住職の宇野弘之氏から特別待遇のたいへん親切なおもてなしを受け、しかも節談説教の第一人者でいらっしゃる輪島満覚寺ご住職・廣陵兼純(ひろおかけんじゅん)師とともに、おいしいお斎(おとき)を食べながらお話しするという得難い貴重な機会を頂戴しました。



「節談(ふしだん)説教」を「せつだん(切断)説教」と読み間違えて、なにやら物騒な説教だなあと考えていたところ、お話しをうかがって恥ずかしい大間違いに気がつきました。配布された解説文によれば「節付(ふしづけ)説教(後に節談説教)は、学問とは異質のもの、学問や理屈ではありません。節談説教とは、言葉に節(抑揚)をつけ、鍛え上げた美声と絶妙の節回しをもって聴衆の感覚に訴える『情念の説教』です。本堂いっぱい聴衆を、鮮やかな弁舌にて陶醉させ、信仰心を深めさせる布教方法」でした。

本式で執り行われた報恩講法要の後にお聞きした節談説教は、人情味にあふれていながら、迫力があり、しかも笑いもありと、時間がたつのをまったく忘れてしまうほどでした。お話しした際に師御自身から、節談説教師の後継者問題について「時代意識、伝道できる場所、経済的サポートの面で、現在その育成には困難が多くなってしまった」とお聞きしていましたので、説教を聞いて、あらためて師の存在はたいへん貴重なのだと感じました。

田邊雅明(仏教会会員)

【目次】

阿弥陀寺 報恩講	……1	韓国滞在記①	……5
池上本門寺・お会式	……2	タイの仏教事情⑧	……6
仏教心理学会に参加して	……2	コラム「仏教と日本文化」⑩	……7
忘年会を振り返って	……3	書籍・イベント情報	……9
モンゴルの仏教文化圏の諸事情①	……4	今後の予定	……10

《活動報告》 ～池上本門寺・お会式「万灯練り供養」～

10月12日(水)に池上本門寺で盛大に催されるお会式を訪れた。参加者は渡辺章悟先生を引率にして総勢10名である。夕方の6時に学校を出発し、到着したのは7時過ぎ。ちょうどお祭りのボルテージは最高潮に達したところで、本門寺の門前町は活気に満ちて自由な身動きが取れないほど多くの人出であった。

お会式とは祖師が入滅したとされる日に各宗派で催される報恩祭である。特に池上本門寺では日蓮入滅の地であることから10月13日を中心に全国でも最大規模のお会式が催される。そしてお会式では華やかな装飾に彩られた万灯がひととき目を引く。これは日蓮が入滅したその時に庭先の桜(お会式桜)が季節外れの花を咲かせたという言い伝えにより作られるものだ。万灯を先導するのは、江戸の火消し衆の象徴である纏(まとい)という棒を振り回す人々である。纏が鮮やかに舞いながら、万灯は本門寺を目指して団扇太鼓と笛の軽快な音色と共に進んでいく。



河の流れのようにとどまることのない人の流れに身を任せながら、なんとか本門寺の境内までたどり着き本堂



に足を踏み入れると、何の申し合わせをしたわけではないが東京大学の蓑輪顕量先生のご一行と鉢合わせになった。そして先生のご好意で日蓮聖人の坐像や日蓮が最後に寄りかかりながら説法したと伝わる御柱などを特別に拝見させていただくことができた。日蓮信仰の核心を目の当たりにできたことには深い感動を覚えたものである。このようなありがたい機会を提供してくださった蓑輪先生には感謝の意を申し上げたい。

そうこうしている内に時間はあっという間に過ぎ去り、終電を逃してはならないと急いで帰途についた。

鈴木伸幸 (インド哲学科3年)

～日本仏教心理学会 第3回学術大会に参加して～

12月10日(土)立正大学において日本仏教心理学会の第3回学術大会が行なわれた。

午前中は上田紀行氏による「慈悲の怒り」と題した講演と災害支援活動についてのワークショップ、午後は個人発表と、学会恒例の交流タイムが行なわれた。

個人発表では、瞑想が精神に与える影響についての発表や、浄土真宗の僧侶、吉本伊信によって確立された内観療法についての発表、死生観についての発表など、仏教と心理学の領域双方にかかわるものが発表された。



日本仏教心理学会は2008年12月に創立したばかりの新しい学会である。創設にあたっては、「人間の心の理解

とその救い・癒し・成長に関わる理論と方法という点で、仏教と心理学はきわめて近接した関係にあると思われるが、残念ながらこれまで日本では本格的な対話や統合の試みが十分行なわれてきたとはいえない。しかし深刻な心の荒廃が指摘される状況下にあつて、今こそ両分野に関わる研究者・臨床家が協力しあい、より統合的で有効妥当性の高い、現代人のための新たな心の理解・救い・癒し・成長の道を拓くことが望まれるのではないか」との共通の問題意識を出発点として設立された。

第1回、第2回大会と実行委員を務め、今回も関わらせていただいたが、年々洗練されてきており、かつ、初参加の方も増えているようであった。学術大会の良い点は、まだ設立間もない学会であるため、研究者、臨床家以外にも、仏教と心理学に関心のある人が参加できるところにある。著名な先生方ともごつくばらんに意見を交換し合い、交流できる「交流タイム」も毎回好評である。

来年の大会は12月に龍谷大学(京都)にて開催されることになっている。それぞれの分野の専門家でなくとも、仏教と心理学の双方の領域に関心のある方なら大歓迎である。大会への参加は、会員にならずとも可能なので、京都への旅行がてら大会に参加してみたいはかがだろうか。

鮫島有理(大学院インド哲学仏教学専攻博士前期課程1年)

～忘年会を振り返って～



2011年12月22日(木)、仏教伝道協会ビル内のレストラン「菩提樹」にて、東洋大学仏教会・仏教青年会の忘年会が行われました。私は2度目の参加でしたが、今年も40名を超える人々が集まり、和気あいあいとした楽しい時間が過ごせました。今年の忘年会の目玉は、東洋大学インド哲学科の学生でもあるグスティ・アユさん達によるバリ舞踊、そして大ビンゴ大会でした。

バリ舞踊は2曲披露されました。1曲目は鮮やかな黄と真紅の衣装、金のゴージャスな装飾品で着飾った二人の女性による、孔雀の舞でした。実際に、美しい孔雀がこれまた優雅に舞い踊っている様に見えます。と

ても綺麗でした。ところで私がバリ舞踊を見て思うのが、指先の美しさです。どの位鍛錬すれば、あの様に美しく反れるのでしょうか。2曲目は、シックな黒の衣装に身を包んだアユさんの舞…と思いきや、観客が1人ずつ誘われ交代でアユさんと一緒に踊るといふ、ハードかつ面白いものでした。私も頑張って踊らせていただきました。緊張しますが楽しい！誘われなかった方は次の機会のお楽しみですね。

大ビンゴ大会は、景品が本、カレンダー、DVD、しおり、かりんとう等々、様々な景品が用意されていました。何が貰えるかはビンゴにならないと判らない…。会場は異様な空気に包まれました。1人2枚のカードが配られ、ラッキーな人は景品が2つ貰える(そうでない人は残念)というものでした。皆様、素敵な景品が貰えましたでしょうか。

他にも駄洒落を交えた仏教会メンバー紹介や、恒例の校歌・応援歌斉唱等、盛り沢山の楽しい内容で、良い1年の締め括りになった様に思います。

最後に。立食パーティーなのですが、私が美味しかったと思うのは、炒飯の上に麻婆豆腐を乗せたものです。贅沢な気持ちになります。

それでは2012年が皆様にとって良い年でありますように！

井 みお(大学院インド哲学仏教学専攻博士前期課程1年)



～モンゴル仏教文化圏の諸事情①～ —内モンゴルの仏教史と現状—

モンゴルでは13世紀と16世紀後半の二度、チベット仏教が弘通した。16世紀後半から、主に青海地方を経由して伝来し、右翼モンゴル・トメイド部の首領アルタンら貴族たちによる仏教帰心からモンゴル各地に広まった。チベット仏教がモンゴルに伝来した当初、寺院ではチベット語の経典が多く用いられていたが、後にモンゴル人はモンゴル語による経典の翻訳を積極的に進めた。しかし、仏教用語、人名、術語などはチベット語の表記のまま音写され、ほとんどのモンゴル仏教寺院でチベット語のまま経典の読誦が行われた。そのために、チベット仏教はモンゴルに深く浸透し、モンゴル文化の主流となった。

20世紀に入ると清朝の対モンゴル保護政策は一変し、漢人の入植を奨励し始めた。モンゴルの仏教寺院も例外ではなく、入植して来た漢人に追われ寺院としての機能を失いつつあった。1919年、清朝打倒運動や辛亥革命が起これ、清朝が衰退していくに乗じて外モンゴルのジェブツンダンバ八世は清朝からの独立を宣言し、モンゴルにはじめて活仏を元首とする政教合一の政権が誕生した。これは後のモンゴル国の独立の基礎となった。

内モンゴルは1919年に外モンゴルへの合併を申し出るも失敗に終わり、1931年9月18日に起きた満州事以降、東部に居住するモンゴル人は満州国に組み込まれてゆく。一方、西部モンゴルではデムチュクドンロブ（徳王）が満州国とともに日本の支援を受け、蒙古連合自治政府を樹立した。当時、モンゴルの全地域において仏教は本来の機能を果たせず、僧侶数の増加に従って、戒律を守らない、経典をよんでも教理や内容を理解できないなどの僧侶が増えるといった僧侶の質の低下や、モンゴル仏教の本来の性質が失われるなどの諸問題に直面していた。

こうした状況のなか、当時の東西モンゴル地域では仏教改革運動が進められた。東部の満州国では、「ラマ教整備要綱」が制定された。これに従って、ラマ宗教団が結成され、僧侶に対して国民教育を普及させ、従来のチベット留学を制限し、日本へ留学僧が派遣された。また、国内でモンゴル仏典の普及を行い、モンゴル仏教の総本山を設立し、寺院財政確保の仕組みを整備するなど様々な改革が実行された。

西部モンゴルにおいても、デムチュクドンロブ（徳王）の指揮のもとで、僧侶の数を制限し、戒律を厳守させ、モンゴル語と仏教学の科目などを設けた僧侶の教育を行う学校を設立した。また、寺院で小規模な工場をつくり、経済面での自給自足を要求した。また、日本の高野山、比叡山、知恩院へ定期的にモンゴル人僧侶を派遣し留学させた。しかし、終戦によって満州国と蒙古連合自治政府が崩壊するにつれ仏教改革も中断された。

中華人民共和国が成立する二年前の1947年5月、内モンゴルは中華人民共和国における最初の民族地域自治区として成立した。その後、中国政府による社会主義的な反宗教政策によって、内モンゴルの言語や文化、仏教は大きな痛手をうけることとなった。例えば、中華人民共和国が成立以来、政府は活仏の転生を一切認定してこなかった。その結果、1949年の時点では、324人の活仏が公式に認定されていたにもかかわらず、2005年にはその数は4人にすぎなくなった。さらには、1966年頃より中国国内全土で行われた文化大革命によって、内モンゴルのほとんどのすべての寺院は閉鎖され、僧侶は追放または還俗させられた。また、寺院に納められていた多くの貴重な仏典や版木は焼き捨てられた。破壊をまぬがれた寺院の建物は倉庫や学校の校舎として転用された。

1980年代以降、中国政府は新たな宗教政策を行った。これによって、現在、およそ60の寺院が再建され、法要をはじめとする様々な活動を行っている。中国国内で生活しているモンゴル人は約500万人いるとされているが、その内の六割が仏教徒である。

オーダム（大学院仏教学専攻博士後期課程3年）

～韓国滞在記①～

韓国滞在記 - 金剛大学校紹介 -

私は東洋大学インド哲学科および仏教学専攻のOGで、2011年春から韓国の金剛大学校で専任の研究者として勤務しています。この度、私の韓国での暮らしや、金剛大学校について、「まいとりの」でご紹介する機会をいただきました。日本国内でさえ一人暮らしをしたことがなかった私が、いきなり外国で、韓国語もまったくできないのに、一人で長期滞在をすることになった…と書くと、我ながらよくこの道を選択したものだと思いますが、そんな私の海外体験がいくらかでも皆さんの参考になれば幸いです。

金剛大学校は、韓国（朝鮮半島ではなく）の中心からやや西側、忠清南道（ちゅんちよんなむど）の論山（のんさん）市というところにあります。大学の近くには、かつて百済の都だった公州（こんじゅ）や扶余（ぶよ）といった街があります。百済はご存じの通り、日本への仏教伝来に深く関わった国ですから、その意味では、金剛大学は日本とゆかりの深い地にあると言えるでしょう。

金剛大学校の母胎は韓国の天台宗です。韓国の天台宗は、日本とは異なり、近代になってから勃興した新宗教の一つですが、学生や教員の中には天台宗と関係のない人も多く、大学全体としても、それほど宗教色が強いわけではありません。私が所属する仏教文化研究所も、韓国の伝統的な仏教思想や、日本・中国・インドといったアジア各地の仏教や文化の研究に力を入れています。ただ、韓国は国民の過半数が信仰をもち、そのうち半分が仏教、もう半分がキリスト教ということもあってか、釈尊の誕生日（旧暦）とクリスマスは国の祝日になっています。金剛大学校でも、花祭りの日には仏塔を駐車場に建て、お祝いをします（写真）。



私は韓国語ができないまま大学に赴任しましたが、研究所の先生方のうち数名は日本語を話せるため、大いに助けていただきました。また、生活面では、大学の寄宿舎の一室を無料で借り、食事は学食ですませることができるので、生活費や料理といった一人暮らしをする上での苦労はあまりしていません。でも、仕事をする上での会話や書類は基本的には韓国語ですし、生活用品や食品などほしいものを町まで買いに行くときには、韓国語ができないと不便な場面も多々あります。そのため、9月から語学堂（語学教室）に入り、韓国語の勉強に専念することになりました。

海外からの留学生は30名以上おり、初級・中級・上級の三クラスに分かれて、韓国語を勉強しています。私の入った初級クラスだけでも、アメリカ、フランス、オーストラリア、台湾、メキシコ、アンゴラなどさまざまな国の人がいます。授業は火曜から金曜の朝8時半から12時半まで、毎日4時間あり、3ヶ月間の授業が終わる頃には、韓国語がまったくできなかった私でも、中学1～2年生の英語程度の、簡単な会話は話せるようになりました。でも、毎日宿題が大量に出され、自分の研究をする時間があまりない上に、初級が終わるまでは研究所の仕事よりも授業を優先させているので、身分は研究者でも、気分は留学生に近い気がします。

金剛大学校は、これから東洋大学とも連携をする機会をもつことになるようです。どのようなご縁かわかりませんが、私は日本と韓国、東洋大学と金剛大学校をつなぐ位置に立っているため、これからも双方の架け橋となるよう、頑張りたいと思います。なお、金剛大学校には日本語のホームページもあるので、興味がある方はご覧ください。

参考：金剛大学校日本語 HP <http://www.ggu.ac.kr/japanese/index.html>

林 香奈（仏教会会員 金剛大学校仏教文化研究所 HK 研究教授）

～タイの仏教事情⑨～

—タイにおけるパーリ仏典の書写・出版の歴史—

これまで、5回の記事を通してタイの仏教教理教育、パーリ語教育とその国家試験について紹介しましたが、今号からはタイにおけるパーリ仏典の書写・出版の歴史について触れてみたいと思います。

第5回の記事で紹介したように、パーリ語は、スリランカ・タイ・ビルマ・ラオスなどの国々に伝播した南伝仏教（上座仏教）経典に用いられる言語です。パーリ語には固有の文字がなく、南伝仏教諸国ではそれぞれ自国語の文字で表記しています。もちろん、現在タイで使用されているパーリ仏典は、タイの文字で書かれています。タイの本来のパーリ仏典は、ランナー（タイの古代北部の名称）文字・クメール文字で書写されたものでした。タイでパーリ仏典が最初に貝葉写本書写されるようになったのは、1477年に行われたタイにおける第一回の経典の編纂会（結集、けつじゅう）の時でした。当時、タイ北部を治めていたティローカラージャ王の支援で行われたため、当時、王が治める地域で使用されていたランナー文字で貝葉写本へ書写が行われたと言われています。



クメール文字貝葉写本

その後、時代の変化を経て、ジャクリー時代の最初の王（ラーマ1世）の時代にあたる1788年に、同じように国王の支援のもとで、タイにおける第二回の結集が行われました。この時に三蔵を熟知する218人の長老が参加し、ラオス文字の写本とラーマンの写本を底本にして、多くの貝葉写本をクメール文字で書写し、国王が建立した各寺院に配布しました。この作業は、5ヶ月間行われました。

タイ文字版のパーリ仏典が初めて出版されるようになったのは、ラーマ5世の時代でした。1888年から1893年までの4年間をかけて、クメール文字の写本を底本にして、タイの文字化をした後、紙本39冊を1000部刊行しました。もともと、45冊を出版する予定で、残り6冊を含めた45冊が揃う完本の刊行作業は、ラーマ6世の時代

に、1925年から1931年までの6年間をかけて行われました。その後、完本は1500部刊行され、200部を国内の各寺院や大学に、450部を海外の寺院や教育機関に寄贈されました。日本のいくつかの大学もそれを受けたということです。残りの850部は刊行に使用された費用として寄付した一般の人々に与えられました。この完本はサヤームラッタ版と呼ばれ、とても有名なタイ版パーリ三蔵です。また、これには初めて索引が付されるようになり、タイの僧侶や研究者に愛用されてきました。

タイの価値観では、仏典はただの本ではなく、仏陀に代わるものとして崇拝の対象にもなります。そのため、仏陀の言葉を記す写本や紙本は、とても大切にされています。各寺院でパーリ仏典を所蔵する場所が特別に設けられているのはそのためです。

以上は、タイにおけるパーリ仏典の書写・出版の歴史の概説でありましたが、次号は、パーリ仏典のタイ語翻訳作業と出版について触れてみたいと思います。

プラチャップン (Phramahāchatpong Katapuñño)

大学院仏教学専攻博士後期課程3年



特別に作られた本棚に所蔵されているパーリ仏典

～コラム「日本文化と仏教」⑫～

ただの恋歌ではない

仏教会会員 作家 永田道子

小野小町といえば絶世の美女として、つとに知られている。クレオパトラ・楊貴妃と並び賞されるのに根拠はないが、恋多き女であることは共通している。

美女というだけでなく、『古今集』の代表的歌人で、すぐれた恋歌を数多く残している。晩年落魄したという伝説ができたのには、百人一首にも採られた

「花の色はうつりにけりないたづらに わが身世にふるながめせしまに」(①)

のイメージが強いせいであろう。「ながめ」を「眺め」と「長雨」をかけて、長雨のせいで褪せてしまった花の色を老いて容色が衰えたわが身にたとえた名作だが、彼女には「色」「花」をキーワードにした歌がもう一つある。

「色見えでうつろふものは世の中の 人の心の花にぞありける」(②)

これも『古今集』の恋の巻に入れられているから、間違いなく恋の歌なのだが、①の「花の色は」の歌と比べると、仏教的な要素がより強くふくまれているところに特徴がある。

この時代の「色」の概念には二通りあり、一つはうつろうもの、変化し消滅するものの意、もう一つは仏教語の色(しき)、つまり認識の対象である物質的存在、目に見えるものである。①の「花の色は」の歌は一つめの意味の「色」であるのに対して、②の「色見えで」の「色」は「いろ」と読ませはするが、意味は二番目の色(しき)であり、「色見えで」は不可得の意味に近い。「人の心の花」は目に見ることはできないとし、第二句の「うつろふものは」で「変化するもの」の意味を重ね合わせて、男の心が変わってしまったことを嘆き怨じているのである。

では、「心の花」とは何か。

『織田佛教語辞典』には「心月」「心珠」「心佛」(いずれも衆生の心性の清浄なることの譬え)はあるものの、「心花」はみえないが、「心華(しんけ)」という言葉がある。「又、満月虚空に出現し、化すべき者の心華を開敷せしめんが如し」「菩薩摩訶薩菩提心華」など、主に八十『華嚴経』に出てくる言葉で、「心蓮華」、もしくは「心蓮」という語でもちいられる場合もある。

また『弘明集』には「心花成樹、共転六塵」とあり、「高僧の説法を聞いた後の清澄な心地」の意である。空海も法会や講席の功德として心蓮の言葉をよく使っている。

当時は法会や唱導がさかんに行われており、小野小町も列席して説法を聴聞する機会は多かったであろう。そこで聞き憶えた「心の花」は、煩惱の最たるものである恋や男女の愛欲を超越した、理想的な心のありようであったはずである。しかし、所詮、凡夫の心の花はうつろう程度のもの。小町は男の心移りを恨みつつ、わが心に咲く花、菩提清浄心もその程度だと自嘲しているのである。

仏典をもとにした恋歌は、『万葉集』からすでにあった。

卷三の市原王の歌、

「頂(いなだき)に著統(きす)める玉は二つなし かにもかくにも君がまにまに」

これは、『法華経』安樂行品の「髻中の明珠」の譬からとっている。転輪聖王は戦功をたてた者に珍宝・金銀・奴婢などを惜しみなく与えたが、髻に秘めた明珠だけは与えなかったという話で、仏法は至上無比のものとの意味だが、それを誰にも与えぬ秘蔵の女性に喩えているのである。折口信夫は、故意かどうかは不明だが、「髻中の明珠」とはせず、「頭に付けてくくっている、つないだ玉はただ一つである。そのように、私はあなたに二心は持っていない。あなたの心任せにどうぞでもしましょう」と訳しているが。

おなじく『万葉集』巻三の沙弥満誓の月によせての恋歌、

「見えずとも誰恋ひざらめ山の端 (は) に いさよふ月をよそに見てしか」

これも折口は「月が見えないからといって、月のことを思う心を断念する人がありましようか。せめて、山の上を出かねてぐずぐずしている月の影を、一目傍からでも見たいものだ。(逢えないでも、よそながら恋人を見たい)」と訳しているが、仏教的に考えれば、月は菩提心の意味ととれなくはない。

月と山の端といえ、和泉式部の歌にこんな歌がある。

「冥 (くら) きより冥き道にぞ入 (い) りぬべき はるかに照らせ山の端の月」

これには「播磨の聖の御許に結縁のために聞えし」という詞書がついており、「山の端の月」は性空(しょうくう)上人のことで、上人が導師となつてはるかな真如の世界へ導いてくださいと願う歌である。これまた『法華経』化城喩品の「冥きより冥きに入り、永く仏名を聞かず」の文言からとられている歌なのだが、小野小町とおなじく恋多き歌人であった和泉式部だけに、恋の歌とも読めなくもない。

現に筆者は、恥ずかしながら、詞書をきちんと読まず、長いこと恋歌と思い込んでいた。「色恋でさんざん苦しみを味わってきた愚かな私なのに、またぞろ性懲りもなく愛欲の闇路に踏み込もうとしている。せめて山の端の月よ、わが行く末を照らしておくれ」

たしか、いまの仕事に入ったときにも、なぜかしきりにこの歌を思い出した。そのときの「冥き道」はやっていけるかどうかという将来への不安だった。

話をもどして、もう一つ『万葉集』の恋歌を。

「水の上に 数書くごときわが命 妹 (いも) に逢はむと うけひつるかも」(巻十一 よみ人しらず)

「水の上に文字を書くような、はかない自分の命を賭けて神に誓いを立ててまで、恋しい人に逢おうと祈っている」という意味だが、これは『大般涅槃経』の「是の身無常にして念念住さず。猶、電光・暴水・幻炎の如し。亦た、水に書くが如く、書くに随い、随いて合す」の文言、水の上に数を取るために線を引くという比喩からの発想である。

こうしてざっと挙げてみただけでも、一見ただの恋歌とおもえる歌の中に、仏典の文言や比喩から想を得たり、意味を重ね合わせているものが沢山あるのに驚かされる。このほか、炎、夏虫、熾火、走り火、愛火など、豊かな表現で使われているのである。

せっかく新年号なので、『万葉集』全二十巻の掉尾を飾る歌で締めくくりにしよう。

「新しき年のはじめの初春の 今日降る雪の 弥頻 (いやし) け 吉言 (よごと)」

すべての人によき年となりますように。

【この稿は、中野方子氏「小町の歌と仏典」(『佛教文學』二十六号所収)を参考にさせていただきました。】

《書籍・イベント情報》

○《書籍》

・『吉蔵の浄土教思想の研究—無得正観と浄土教』

伊東昌彦/著 (春秋社 23000 円+税)

本学大学院卒業生の伊東氏による学位論文。三論宗の大成者吉蔵の浄土教思想と日本への伝播を丹念に追う。東大寺に伝わった吉蔵の浄土教には日本の浄土教成立に欠かせない要素があったことを示し、当時の浄土教者の宗派間における自由闊達な思想的交流があったことを説き明かす。

・『中国中観思想論—吉蔵における「空」』

高野淳一/著 (大蔵出版 10000 円+税)

中国仏教において中観・空思想を大成した吉蔵の思想的源流、その普遍性・独自性を多角的に考察する。現存する著作の精査を通して、その思想の枠組みや展開の過程、到達点までを明らかにする。さらに、先行する古訳以来の仏教理解や類似する中国固有の思想、同時代の仏教者の見解を丹念に比較し、吉蔵思想の核心に迫る。

・『大谷光瑞と国際政治社会—チベット、探検隊、辛亥革命』

白須浄真/著 (勉誠出版 5000 円+税)

20 世紀初頭のアジア世界は「国際政治社会」というべき当該国と近隣諸国および西洋列強の思惑が複雑に入り乱れる状況にあった。この状況下で大谷光瑞が果たした役割とは何か。その後のアジア世界、宗教世界、日本外交にどのような影響を残したのかを明らかにする。

・『西域—流沙に流れる仏教の調べ』

能仁正顕/編 (自照社出版 2400 円+税)

龍谷大学で 2008 年度に行われた全 10 回の仏教特別講座の講義録。前半は大谷探検隊を中心としたテーマを扱い、後半では西域における宗教や美術について詳しく解説する。類書が少ない中で希少な書籍と思われる。

・『法華経の基礎知識—全 28 章を読む』

大法輪閣編集部/編 (大法輪閣 1600 円+税)

「大法輪」に連載された特集「法華経」と「法華経事典」を合わせて編集したもの。法華経全体の構成、覚えておきたい重要語、主な登場人物等を紹介し、さらに全 28 章それぞれのあらすじや大切な教を平易に解説する。法華経がなぜ「諸経の王」と呼ばれるのか、他の経典と何が違うのかが理解できるように配慮がなされている。執筆陣は一流の研究者で構成され、信頼できる内容である。

・『新・仏教とジェンダー—女性達の挑戦』

女性と仏教東海・関東ネットワーク/編 (梨の木舎 2400 円+税)

本書は、2004 年に朱鷺書房から出版された『ジェンダーイコールな仏教をめざして—続女たちの如是我聞』の続編。ジェンダーを切り口に、宗門の制度、社会へのヴィジョン、女性仏教者への教化活動、寺院内の平等な人間関係など女性仏教者による問題提起を通して、女性を対等な構成員としてみなしてこなかった仏教界への批判の書となっている。

○《イベント》

1月から3月にかけて、初詣や節分・初午・涅槃会など、多くのイベントが行われます。今回は節分豆まきを中心に、季節の行事を行う寺社などを紹介します。

● 節分「豆まき」イベント (2月3日) があるお寺・神社

- ・成田山新勝寺 午前 11 時、午後 1 時 30 分、午後 4 時
- ・浅草寺 午後 4 時から 20 分おきに 4 回
- ・増上寺 午後 12 時 30 分
- ・池上本門寺 午後 3 時
- ・大國魂神社 午後 2 時、午後 4 時、午後 6 時
- ・豊川稲荷東京別院 午後 2 時

- ・長谷寺 (神奈川県鎌倉市) 正午
- ・輪王寺 (栃木県日光市) 正午、午後 2 時 45 分
- ・真間山弘法寺 (千葉県市川市) 午後 2 時 30 分

※昨年度の情報を元に作成しています。例年、力士や著名人による豆まきが行われています。日時・内容などの詳細は、直前に必ずご自身でご確認下さい。

● 季節の行事

- ・少林山達磨寺「七草大祭だるま市」(群馬県高崎市) 1/6 (金)、7 (土)

福だるま発祥の寺で、6 日の前夜祭から多数の参拝者で賑わう。7 日は大般若転読法要が執り行われる。

- ・鳥越神社「お炊上とんど焼き」(台東区) 1/8 (日) 午後 1 時

お正月にお迎えした神さまをお送りする日本の伝統行事。本殿前に設営した壇からは大きな炎・煙が舞い上がる。

- ・太宗寺「初閻魔」(新宿区) 1/15 (日)、16 (月)
- 江戸三閻魔の一つで、都内最大の閻魔像が公開される。
- ・亀戸天神社「うそ替え神事」 1/24 (火)、25 (水)

鶯(うそ)は幸運を招く鳥とされ、毎年新しい「うそ」に替えることで悪事を避けるという江戸時代からの行事。

- ・高岩寺「巢嶋とげぬき地蔵例大祭」 1/24 (火) 午前 10 時 30 分、午後 2 時 30 分

毎年正五九(1月・5月・9月)の24日に、大般若転読法要が執り行われる。

- ・深大寺「元三大師大祭 だるま市」 3/3 (土)、4 (日)

深大寺の最も大切な行事。天台宗の良源(元三大師)の祈祷法要にあやかる縁起だるま市が開催される。

● 金沢文庫 特別展「仏像からのメッセージ」

「興正菩薩叡尊鎌倉下向七五〇周年記念」として開催。真言律宗の遺品を中心とした像内納入品を通して、中世の人々の精神世界に迫り、その一端を明らかにする。大阪・大通寺所蔵の阿弥陀如来立像から発見された、大量の像内納入文書を初公開する。

日時：12/9 (金)～2/5 (日)

9 時～16 時 30 分

観覧料：一般 500 円、学生 300 円

住所：神奈川県横浜市金沢区金沢町 142 (京浜急行「金沢文庫」駅下車、徒歩 12 分)

※休館日は毎週月曜と、12/29～1/3、1/10 (火) です。

～ 東洋大学仏教青年会・仏教会、今後の予定 ～

※勉強会についてのお問い合わせは下記の連絡先をお願いいたします。(会員は無料で参加できます。)

《語学勉強会》

○仏教漢文講読会

講師：橘川智昭

会場：5303 教室

日時：隔週木曜 4 限

『法華経』を読みながら漢文の読み方と仏教の思想を学ぶ。

○サンスクリット文献勉強会

講師：出野尚紀

日時：隔週水曜日の 6 限

『ブッダチャリタ』を読みます。初心者大歓迎です。

○チベット文献講読

講師：石川美恵

日時：隔週月曜 18:30～19:30

内容：ツォンカパの『ラムリム』「菩提心の儀軌」の章を読みます。チベット語初心者も歓迎です。

会場：インド哲学科共同研究室

参加希望者は石川<danakoshajp@yahoo.co.jp>までご連絡下さい。

* <語学勉強会>は資料等の準備がありますので、仏青会長または仏教会事務局長宛まで、あらかじめご連絡下さい。

《各種研修》

東洋大学仏教会・仏教青年会総会

日付:2012年3月31日(土)

時間:14時～16時

場所:東洋大学白山キャンパス 6号館(教室は未定)

岩田孝先生(早稲田大学教授)による講演を予定しております。

※随時会員を受け付けています。入会希望者は下記までご連絡下さい。会員規約・活動内容・受付手続きなどの詳細はホームページ (<http://www.toyo-yimba.org>) をご覧下さい。また、紹介したい行事や掲載したい記事などがございましたら、このアドレスまでご一報下さい。

編集責任者：文学部インド哲学科 3年 鈴木伸幸

東洋大学仏教会

卒業生、一般：年会費 3000 円、特別賛助一口 5000 円

東洋大学仏教会事務局長 岩井昌悟

〒112-8606 東京都文京区白山 5-28-20

東洋大学インド哲学科第 8 研究室気付

Tel: 03-3945-7393(-7357) E-mail: tba.bussei@gmail.com

東洋大学仏教青年会

学生：年会費 1000 円

東洋大学仏教青年会会長 藤森晶子

db1000016@toyo.jp

URL: <http://www.toyo-yimba.org>